環論 NO.3 要約

今日のテーマ: $\boxed{\text{イデアル、「生成されるイデアル」}}$

定義 3.1. R は単位元をもつ環であるとし、I はその部分集合であるとする。I が R の**イデアル**であるとは、次の条件が成り立つときにいう。

(1) I は $(R, +)$ の部分群である。すなわち、I は R の加・減法について閉じている。

(2) I の元に R の元を右から掛けても左から掛けてもやっぱり I の元になる。すなわち、任意の $x \in I$ と任意の $r \in R$ について、

$$rx \in I, xr \in I$$

が成り立つ。

例 3.1 (イデアルの例)**.**

(1) $10\mathbb{Z}$ は $\mathbb{Z}$ のイデアルである。

(2) もっと一般に、$n > 0$ にたいして、$n\mathbb{Z}$ は $\mathbb{Z}$ のイデアルである。

(3) 更に一般に、任意の可換環 R と 任意の $a \in R$ にたいして、 aR は R のイデアルである。

(4) 任意の環 R に対して、 $\{0\}$ は R のイデアルである。

「生成される部分環」を扱った時と同じ議論で、次のことが成り立つことがわかる。

補題 3.1. 環 R の部分集合 S が与えられているとする。このとき、S を含む R のイデアルのうち、最小のものが存在する。*(これを S で生成される R のイデアルといい、$\langle S \rangle_{R\text{-イデアル}}$ とか、 (S) と書く。)*

例 3.2. 環 $\mathbb{Z}$ のイデアルとして、次のことが成り立つ。

(1) $(2) = 2\mathbb{Z}$.

(2) $(10) = 10\mathbb{Z}$.

(3) $(12, 18) = 6\mathbb{Z}$.

(4) $(10, 24) = 2\mathbb{Z}$.

例 3.3. 環 $\mathbb{Q}$ のイデアルとして、次のことが成り立つ。

(1) $(2) = \mathbb{Q}$.

(2) $(10) = \mathbb{Q}$.

(3) $(12, 18) = \mathbb{Q}$.

(4) 上の例に限らず全ての $\mathbb{Q}$ のイデアルは $\{0\}$ か $\mathbb{Q}$ 自身である。

上の 2 つの例を比較すると分かるように、どの環で考えるかが大変重要である。

問題 3.1. $\mathbb{Z}$ のイデアル I が 4615 と 1469 を元として含むとき、13 も I の元であることを示しなさい。